

各教科で汎用的に活用できる 書く力の育成

四條畷市立忍ヶ丘小学校

Why

なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- ① 本校は長年「国語科」の研究に取り組んできた。その中で、特に力を入れてきた「書く力」をより育むために、教科横断的に活用する取り組み方を共有する必要があった。
- ② ①を実現するためには、学年のカリキュラム、各学年間の縦のつながりを見て、系統的に行う必要があった。

How

どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 以下の点でPDCAサイクルに基づき、課題の改善に取り組んだ。
- 国語教材を「説明力」「理由力」「感想力」の3つの観点で分類し、教材と他教科との関連を確認し、単元を構想
 - 主体的な学びを支える「ことばの力」を育む指導
 - しかけシートの作成、スタサポファイルの資料作成と活用促進
 - 低、高学年ブロックでの研究授業

Change

どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 各学年が教科の枠をこえて単元構想し、大きな捉えで学習活動をするようになった。
- 児童が書く時に「何のために」書くかを意識して、意欲的に取り組めるようになった。
- 児童がK（既習事項）W（学習課題）L（ふりかえり）を意識できるような単元の導入、まとめを大切に授業づくりが定着した。



1. 令和2年度までの 本校の取組み

(1) 本校児童の実態

忍ヶ丘小学校は、四條畷市の中心から少し山手に上がったところにあり、校区は住宅地が多く、緑豊かな静かで落ち着いた環境にある学校である。そのような環境下、児童は落ち着いて学習ができ、課題にも一生懸命取り組んでいる。

しかし、全国学力・学習状況調査等では、目的や条件に照らして、自分の考えを適切に書けない児童が多かった。加えて、学校教育自己診断の児童アンケートの「国語などいろいろな学習を通して、文章を書くことはうまくなってきた」の項目で、肯定的評価があまり高くなく、自信が持てていない実態も見えた。



(2) 書く力をつけるために

前項で示した書く力をつけるために、平成29年度より大阪府の授業改善推進事業の指定を受けたことをきっかけに、国語科を核に「ことばの力」を書く力で高める取組みを始めた。

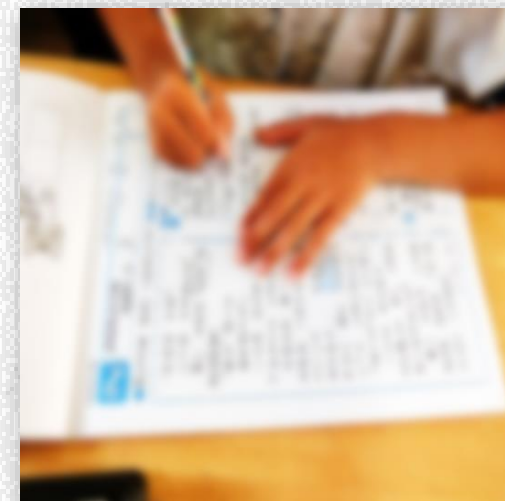
その中で、次の3点について重点的に取り組んだ。

- ① 校内研究授業の充実
- ② 読解力をつけるためのモジュール学習
- ③ 100字ワークの取組み

それぞれの取組みについて、順に説明する。

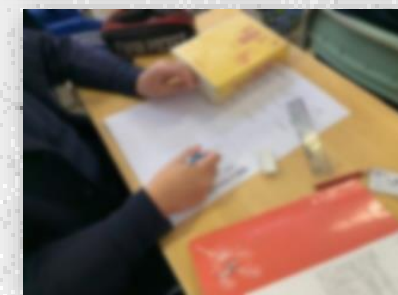
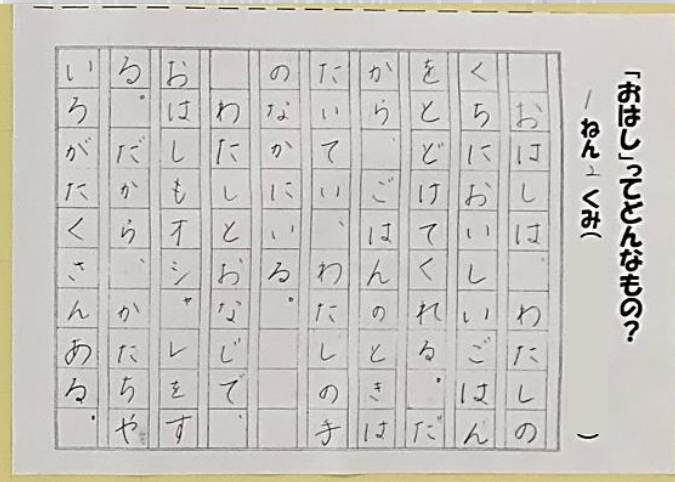
① 校内研究授業の充実

「書く力を汎用的な力とするために」をテーマに研究授業を行い、指導案を作成するときは、授業者だけでなく、低・高学年ブロックに教員が分かれて考えを出し合うようにし、全ての教職員が学ぶ機会を設けた。また、日頃から国語科のワークシートを作成した際は、全教員がいつでも見ることができるファイルに一部挟むようにし、次年度に生かすように教材の共有化を図った。



②読解力をつけるためのモジュール学習

全校で毎週木曜日、国語の読解ワークに取り組んだ。問題を解く前に、5W1Hのキーワードに線を引いたり、項目ごとにカラーリングするなどの手立てを示したりし、何をどう書けば良いか児童が読み方を学べるようにした。指導にあたっては、どの教員も同じ指導ができるように、毎年年度初めに教職員研修を行った。この活動が、児童の読解力向上につながったと感じている。(なお、教材は1学年下のものを使用)



「おはし」をテーマにして、教員が100字で説明文のモデルを書いてみました。担当している学年によって内容が違ったり、説明する観点がさまざま、教員にとっても、学びの多い取組みになった。

③100字ワークの取組み

月ごとに1つのテーマを決めて、全校児童が100字以内で作文を書く取組みを行った。ただ単に書く活動をするだけでなく、教職員も対象を説明するための15の Kategorie を活用しながら児童と同じテーマで作文を書いた。教職員が書いた作文(左図)を校内に掲示し、掲示された作文をモデルに、どのような工夫がされているかを児童と分析することで、読み手に伝わりやすく書く力を高めることができた。あわせて、児童が文字数を意識して要約したり、加筆したりして書く姿も見られるようになった。令和4年度からは、全校でテーマ設定して書くのではなく、各学年・各教科で必要に応じて実践をしている。

2. 令和3・4年度の取組み

(1) 「しかけシート」の作成

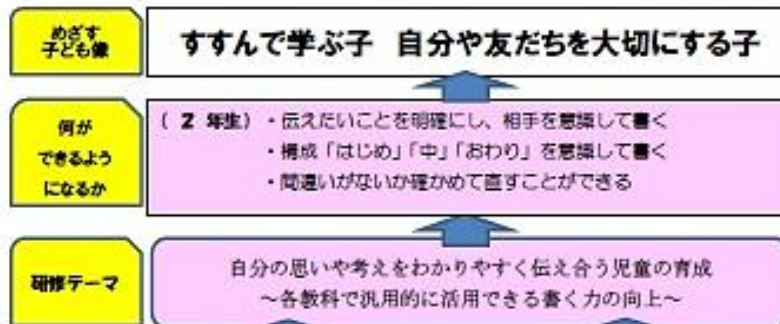
令和3年度からは、令和2年までの成果や課題に基づき、自分の思いや考えをわかりやすく伝え合う児童の育成をめざし、国語科で身に付けた「書く力」を汎用的な力とするために、カリキュラムをマネジメントし、他教科でどのように生かしていくのかに焦点を絞り、「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール」を作成するとともに、以下のような取組みを実施した。

- ①国語科の各単元の概要を把握し、「書く力」のうち主に「説明力」「理由力」「感想力」のどの力の育成につながるかを分類する
- ②年間指導計画を見直し、「書く力」を生かせそうな他教科の学習活動と色別の線をつなぐ
- ③教職員で共有しやすいように、「書く力」を「説明力」「理由力」「感想力」にわけ、3つの力のうちどの力と関係するのか、どの場面で教科横断的な取組みが行えるのかを1枚のシートにまとめた「しかけシート」に具体的な取組みを記入して、指導計画（学習計画）を立てる

「しかけシート」を作成することにより、他教科との関連が見えやすくなった。また、学年ごとにファイリングし、教職員がいつでも見られるように職員室に棚を設けたことにより、学年の取組みが次年度にも引き継がれることとなった。

しかけシート

①のぶしょうのみんなが ②きたいとおもう ③いかく シート



| 教科等 単元名 | 国語 2年 「かんざつ名人になろう」 | 生活 2年 大きくそだてわたしの野さい |
|------------|---|---|
| 書く力 | 説明力 理由力 感想力 | |
| 単元目標 | 経験したことから書くことを見つけ、必要な事例を調べたり確かめたりすることができる | 野菜が育つ場所や変化の様子に感心を持ち、世話の仕方を調べたりしながら楽しみをもって大切にすることができる |
| 学習メモ | ①かんざつに必要なカテゴリーをまとめる。 メモの書き方を確認する。 ・大きさや形、色を見る。 ・長さをはかる。 ・いろいろな方から見る。 ・さわった感じ ・数を数える。 ・においをかぐ。 ②観察したことを記録する文章を比べる。 ・観察したことがよく分かる方はどちらか考える。 ・カテゴリーが多い方が観察したことがよくわかる。 ③メモをとる ④メモを見て観察カードにかく。 | ①これまでの栽培経験を話す 育てたい野菜を選ぶ ・ミニトマト ・ナス ・ピーマン ②野菜を育てるにはどんな準備が必要かを話し合う。 ・どんな準備が必要か ・1年生のときはどうしていたか。 図鑑を見て必要なものを準備シートに書く。 ・土、肥料、苗、植木鉢、支柱 ③苗の写真を選び、観察する。 算数 ・長さ |



「しかけシート」のファイルを、「書く力」を高めるための参考資料や、カリマネ関連の書籍と一緒に本棚に置いて、いつでも見られるように工夫した。



◀しかけシート



◀カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール

「しかけシート」の例

(2)学習教材としての 「すたサポファイル」の導入と活用

「すたサポファイル」とは、児童が学んだことを大切に保管できるファイルのことである。

本校の校内研修を指導いただいている研修講師の尾崎靖二先生（以下、尾崎先生）からのご助言がきっかけで生まれた。ファイルの作成に当たっては、

「児童の学びに（特に教科横断的な視点で）どのようなものがいつ必要なのか」

「6年間引き継いでいくことのメリットがあるのではないか」

「引き継ぐためにはどのような方法が考えられるか」

など、低学年部会・高学年部会に分かれて意見を出し合い、合意形成を図った。

例えば、語彙力を高めるために使用する際は、児童が中心となって気持ちを表す言葉を出し合ったり、接続語の使い方をまとめた語彙表を作成したりして「すたサポファイル」に挟むようにしている。作文やふりかえりなどを書くときは「すたサポファイル」を参考にすることで、書くときに考え込む児童が少なくなった。

取り組み始めた令和3年度は、教員が作成したものをファイルに入れていたが、令和4年度からは、児童自身が作成したものをファイルに入れることを意識した取組みを進めている。

「すたサポファイル」についての参考資料はこちらです↓



ふり返り例



児童が作成した語彙集(2年)



「すたサポファイル」を使って
ふりかえりをおこなっている

(3)校内研究体制の充実と 取組みの共有化

研究を推進していくためには、何より教職員が取組みの方向性を共有化していく必要があった。そこで、「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール」をもとに、

1学期 ⇒ **オリエンテーションと試行、計画**

夏休み ⇒ **講師を招いての実践研修・学年ブロック研修**

2、3学期 ⇒ **具体的な取組み（研究授業含む）**

と進めていき、取組みの充実と改善を図った。また、担当者から校内の取組みを共有するための通信「かりまねっと」を発行し、本校の課題や現状、外部研修で学んだことの共有などを積極的に行った。

① 1学期 オリエンテーションと試行・計画

5月に学習部主催で本校研究についてのオリエンテーションを実施し、国語科をベースにしてどう「書く力」をつけるのか、これまでの取組みや有効だった手だてなどを紹介し、各学年のめざす「書く力」の目標設定をした。その際には、国語科の学習指導要領を参考に、「つけるべき力」の確認も行った。

1学期分のカリキュラム表から「説明力」「理由力」「感想力」を観点に、各教科のつながりを話し合い、図示することで共有することができた。また、市教育委員会指導主事を招き、カリキュラム・マネジメントについて研修を実施した。

このオリエンティングを受けて、各学年で1学期の「しかけシート」を作成し、試行的に取り組んでみることにした。



②夏休み 講師を招いての研修・学年ブロック研修

試行的に国語科と他教科をつなぐ取組みを行い、つながりを意識した指導の良さを各自が実感したところで、尾崎先生にご指導をいただいた。具体的に国語科の教材がどの教科のどんなところとつながっているか、各学年の指導事項を踏まえてどのように系統的に指導を進めていくべきかなど探究的学習を例示していただき、学ぶことができた。教職員からは、「子どもたちが書くためには読む力が必要だとわかった」、「学習活動には必ず、書く、話すという言語活動が必要で、言葉の引き出しや構成力が身に付くように指導しなければならない」、「国語科でつけた力があらゆる教科につながっていることがわかった」等の意見が出てきた。カリキュラム・マネジメントを行っていく上での視点を教職員一人ひとりが掴む機会となった。

このような経緯を踏まえ、「自分が2学期にカリキュラム・マネジメントを意識する授業をするとしたら」というテーマで一人1本授業素案を持ち寄り低学年・高学年部会を実施したことで、「教職員一人ひとり」が「自分事」としてカリキュラムを作成してみる体験をすることができ、同じ教材でも違ったアプローチができるということも分かり、より良い実践につながった。



研修の様子

③2・3学期 具体的な取組み（研究授業等）

夏休み中に2学期の「しかけシート」と、カリキュラム表の書込みを行い、それを踏まえて「すたサポファイル」に入れる資料作りを各学年で行った。

令和3年度は、6年生で国語科と社会科、1年生で国語科と生活科で研究授業を行った。また、令和4年度も、11月に6年生で国語科と総合的な学習、1月に2年生で国語科と生活科のカリキュラム・マネジメントで研究授業を行った。研究授業に向けて、低・高学年ブロックで教材研究や、授業の進め方を検討し、今までの取組みがより一層深まった。

Topics

<市教育委員会による支援>～校内研修実施にあたって～

学校が「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく」ように、学校への支援は、**「学校の教育課程の実施状況を学校外（市教育委員会）から評価して、その学校と市教育委員会が協働して改善を図っていくこと」**だと考えている。

学校に寄り添った支援はもちろん必要だが、学校の状況を客観的に評価し、成果や課題点、その背景について学校の管理職、先生方にフィードバックしたり、助言したりするようにし、PDCAサイクルがより円滑に回るように支援することを心がけている。

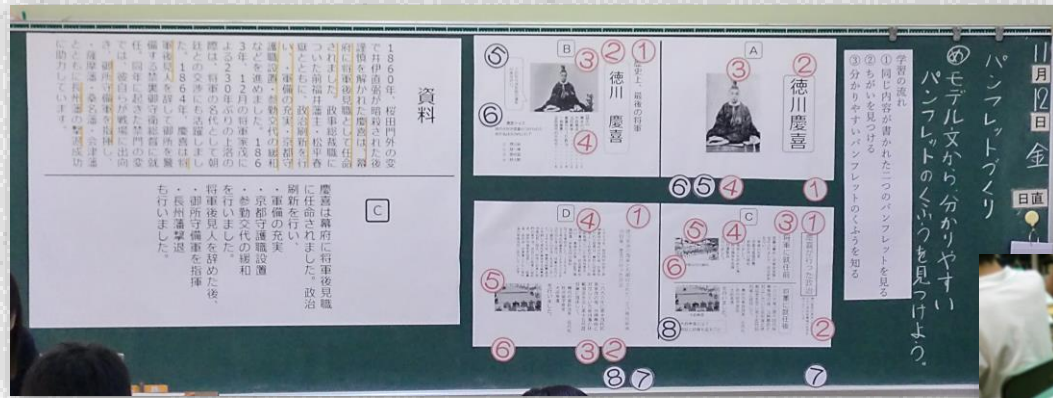
学校と市教育委員会が子どもの学びのマネジメントにむけて、共に考え、ともに取り組む支援体制をこれからもめざしていきたい。

(4) 教育課程の見直し

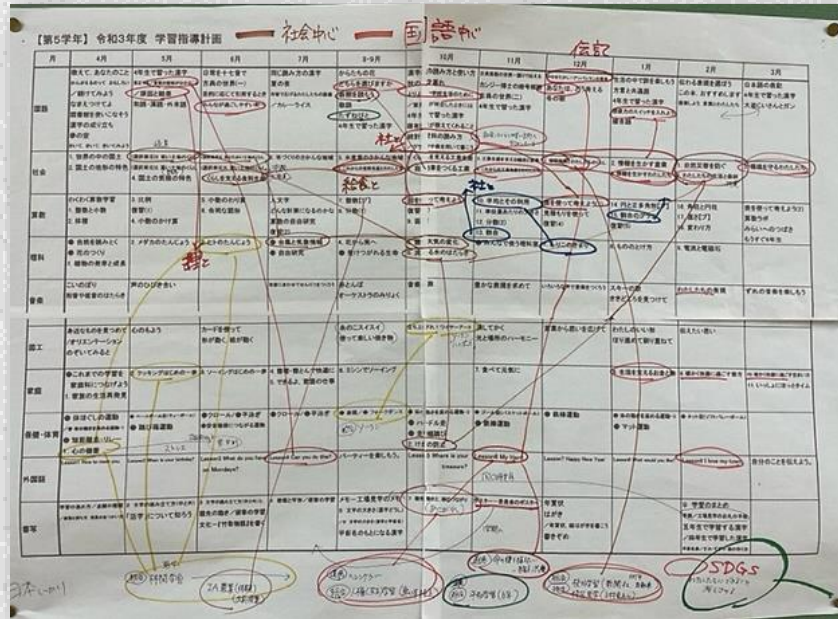
教職員が頻りに利用する会議室に、全学年分の単元配列表を掲示し、教科等横断的な視点を教職員が常に意識できるように工夫している。この単元配列表は、学期の終了ごとに授業を担当している教職員で教科間のつながりについてふりかえりを行い、単元配列表に教科等横断的な取組みができそうなところを線でつないでいくことで作りあげたものである。この作成の過程で、教職員が教科等横断的な視点を持って授業に臨むことができるようになった。

例えば、6年生では、国語と社会を関連付けて、「歴史人物パンフレットを作って5年生に紹介しよう」という学習を作り出したり、1年生では、生活科と国語科を関連付けて、「小学校のいいこといっぱいを新1年生に伝えよう」という学習を地域のこども園とも連携し、作成したりした。

研究授業を行うにあたっては、必要な書く力を国語科でおさえ、いくことを念頭に置き、他教科の学習の中に書く力を組み込んでいけるように国語科と他教科両方の学習指導要領の内容をふまえて指導計画を作成することとだけでなく、討議会においても、「国語科で培った書く力が他教科どう生かしているか」という視点で意見交流を行うことで、教職員の書く力のつながりの理解が深まるようにした。



6年生 国語と社会を関連付けた
「歴史人物パンフレットを作って5年生に紹介しよう」
同じ内容だが、異なる表現で書かれた二つのパンフレットを読み比べることを通し、分かりやすいパンフレットの工夫を見つける学習

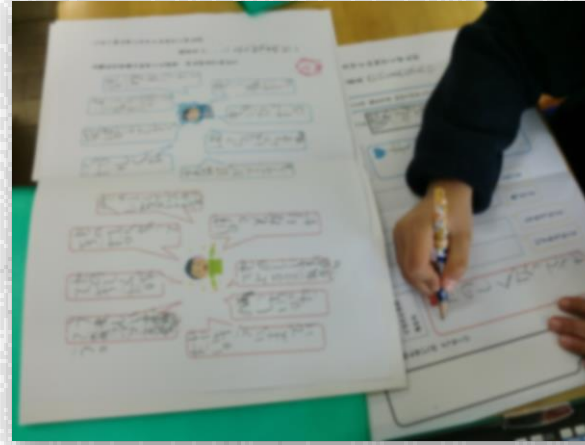
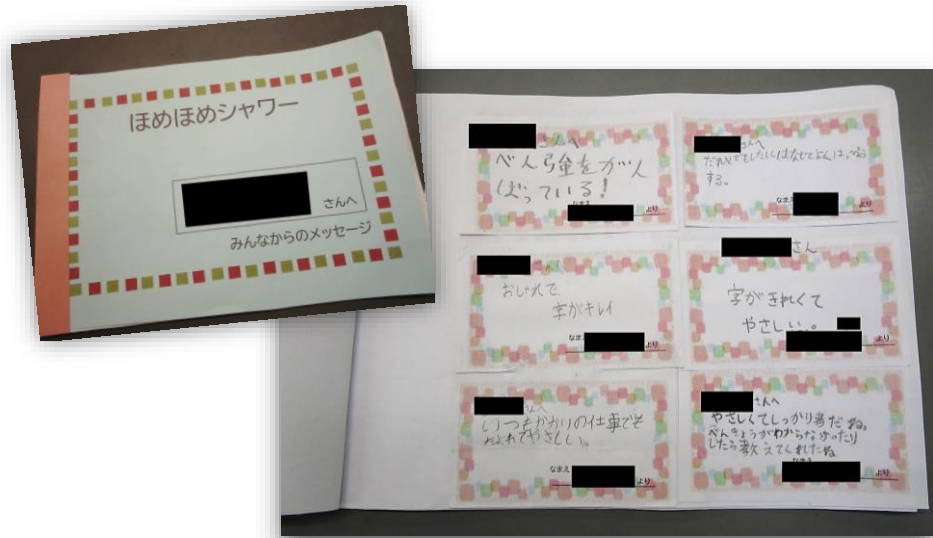


教科等横断的な視点で、教科間のつながりを色分けして線で結んだ。
会議室に常時掲示しているのので、いつでも気付いた時に、つながりを記入できるようにした。

(4)教育課程の見直し

会議室には他にも、本校の児童の実態について協議した資料も掲示している。児童の実態は教育課程を編成する上での基礎である。教職員に常に意識してもらうことに加え、協議から浮かび上がってきた課題を解決するためにも活用している。

今年度は、教職員どうし話し合いから導き出された課題を解決するために、児童の自己肯定感を上げる「ほめほめシャワー」の取組みを行っている。クラスの友だちの良いところを探してメッセージを書き、児童ごとにファイリングしてプレゼントする。取組み前後のアンケートから児童の変容を見取り、次の取組みへとつなげていった。



1年生 国語と生活科を関連付けた「小学校のいいことといえばいを新1年生に伝えよう」「できたときの気持ち」と「できなかったときの気持ち」を表す言葉を考える学習
出てきた言葉は学級の語彙表になり、児童は「すたサポファイル」に大切にしまっている。



会議室に常時掲示しているので、いつでも気付いた時に、つながりを記入できる

3. 取組みの成果・課題と今後に向けて

(1) 教員の変容と課題

〈変容〉

本校では、教職員の変容を見取るために全教職員に1学期と2学期の2回、(A)「授業実践レベルでのカリキュラム・マネジメントについて」、(B)「学校レベルのカリキュラム・マネジメントへの自身の関わり方について」の2つの観点でアンケートを取っている。(注1)

令和3年度のアンケート結果では、ほぼすべての項目で肯定的回答の割合が上昇した。特に、(A)の質問項目「私は、教科指導において、知識・技能の習得だけでなく、単元を通して重要な概念やプロセス、原理などを深く理解させるように指導をしている。」は大きく上昇した。(39.1% → 88.3%)

(注1) 参考：「カリキュラムマネジメント・ハンドブック」
田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 編著



アンケート項目データ

令和4年度1学期のアンケートでは、教職員的大幅な入れ替えもあり、全体的に肯定的回答の割合が減少した。しかし、1学期と夏休みの研修に加え、単元配列表や「すたサポファイル」の活用を通して取組みが教職員全体に浸透していき、2学期のアンケートではすべての項目で肯定的回答の割合が増加した。令和4年度は特に、(A)の質問項目「私は、各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して日々の授業を行っている。」が大きく上昇した。(43.5% → 95%)

〈課題〉

カリキュラム・マネジメントは、教育の質の向上につなげていくための取組みであるが、具体的な効果を数値で表しづらい点が課題だと考えている。今回のような教職員アンケートで意識の変容が見える化し、教職員のこれまでの取組みを価値づけ、前向きに推進していくことが今後も必要不可欠であるとする。また実践を視覚化するために活動の様子や成果物を校内掲示する、またコロナ禍でなかなか実施できなかった授業公開など、取組みの共有化を図る必要がある。

(2) 児童の変容と課題

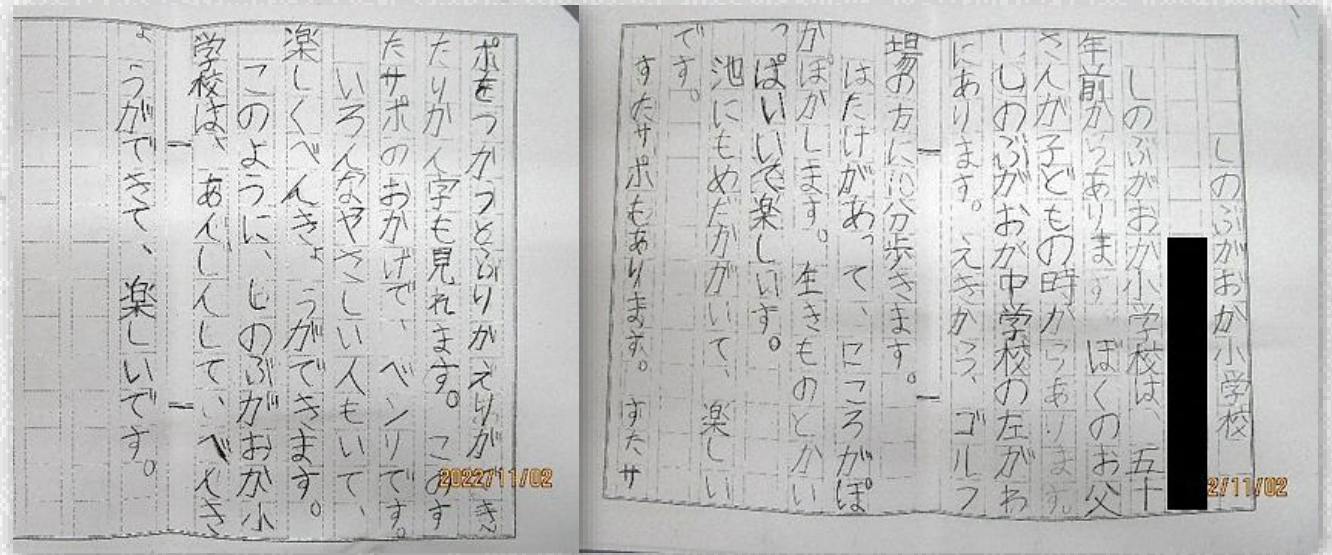
〈変容〉

全教科を通して書くことに対して抵抗感がなくなった児童が増えた。書くことがわからない場合も「すたサポファイル」を参考にしながら書こうとする姿が見られるようになった。作文指導をする際に、書き出しの工夫の仕方を指導したり、すぐに原稿用紙に書くのではなく、構成メモに整理する時間を取り入れたりするようになった。

また、カリキュラム・マネジメントを意識した授業づくりを校内全体で実践することにより、教職員も他教科と関連させながら授業づくりをするようになった。児童たちは他教科でも、国語科で学習した「書くこと」を意識しながら、文章を書く姿が見られるようになった。

〈課題〉

語彙表を活用しながら積極的に書こうとする姿は見られるようになったが、語彙の使い方が適切でない様子が見受けられる。継続的な書く力の指導や、ノート掲示を通して、自分の思いを正しく相手に伝えることができる書く力を身に付けた子どもたちを育ていきたい。



「ノート名人」の掲示

「名人カード」を作り、「〇〇(説明.振り返り)名人!」と合わせて掲示することで、児童がどこに着目してノート名人をめざすのかが明確になりました。

2年生 児童の作文より 「すたサポファイル」について

自分の学校の特徴を紹介する活動の中で、2年生の児童が、1年生の時からよく使っている「すたサポファイル」を忍ヶ丘小学校の特徴だと紹介してくれました。

(3) 今後の展望

本校がこの2年間、国語科をベースとしたカリキュラム・マネジメントの取組みを行う中で、前述したような教職員及び児童の変容した姿が見て取れた。

今後も、「やらなければいけない」から「やる」のではなく、「やる必要がある」から「やる」ことを常に念頭に置き、「型」にあてはまらない、児童や地域の実態に即した本校独自のカリキュラム・マネジメントを進めていきたい。



Topics

文部科学省によるカリマネ事業実地調査の様子について

訪問日：令和4年9月20日（火）

訪問者：千葉大学名誉教授 天笠 茂 委員

奈良教育大学教育連携講座教授 赤沢 早人 委員

独立行政法人教職員支援機構 御担当

文部科学省初等中等教育局教育課程課 御担当

内容：授業参観（2・4・5年）、研究に関する協議会等



<協議会での委員からの指摘事項について（抜粋）>

（奈良教育大学教育連携講座教授 赤沢 早人 委員 より）

Q.（担当の中山先生より）教員が動いても効果を感じにくい面…例えば、子どもに具体的に変容が出てきにくいところなどは、時間がかかるのでどのように捉え、取組みを続けていけばよいか。

A. アンケートをとったりして、子どもの変容を定量的にはかれば、学校が何もしなかった状態よりは上がったのかな、と思えるかもしれないが、どれがどうつながって効果があったのかわかりにくいのがカリマネ。時間はかかるかもしれないが、長く続けていって、教員や子どもの変化の兆しをフィードバックしていくことが大切。一人ひとりの子どもに現れた兆しみたいなものを、学校のみならず喜べるような雰囲気も必要。学校の中で管理職や担当者が俯瞰的に見てフィードバックすることも大切だが、**指導主事が学校を外からみて話をする、価値づけする**ということもあわせてやっていくとよい。

（千葉大学名誉教授 天笠 茂 委員 より）

★今回の授業はどの学年も、導入→展開→まとめの中で、「すたサポファイル」を活用しながら、教科等横断的にできていたが、45分の中で教科横断的な学びを追究することをテクニカルに求めすぎないことが大切。そういう風に陥りがちであるが、**「単元配列表の中に答えがある」**という視点を常に持つことが大切。1単位時間ではなく、単元のかたまりとしてつながりが押さえられていれば充分（「前に他の教科で学んだよね」、「次はこの教科でこれをやるよ」という感じ）

★「ミドルとカリマネ」…中堅の先生にこそ、カリマネ研修はとても必要だといえる。ミドルの先生方がカリマネを理解していないと広まらない。今日の授業が「カリマネを体現している」ということを共有することは、管理職や担当者との先生方の意識をつなぐよいモデルとなる。その意義を、「今日の3名の先生方が、どう思いで授業を作っていたのか」という視点で、校内研修等で共有し、**学校の先生の“参画意識”を高め、“自分ごと”として経営活動に関わっているんだと実感できる**とよい。「教育活動」と「経営活動」について、多くの先生は、「教育活動」＝授業、「経営活動」＝管理職の仕事という感覚かもしれない。

でも、そうではなく、「学校教育目標」や「グランドデザイン」、「教育課程」を具体化したもの（単元配列表）——**これらを抛りどころにして学校全体で展開していくところが「経営活動」であると認識してみる**のが大切ではないか。

それが、学校の先生の“参画意識”を高め、“自分ごと”として経営活動に関わっているんだという実感を持つことにつながっていく。

